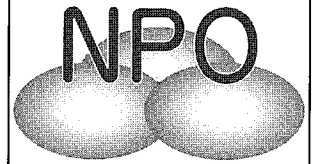


●特集 NPOで地域づくり

# まちづくりとのかかわり、NPOへの期待

西村幸夫氏（東京大学教授）に聞く



30年以上にわたり全国各地のまちづくりにかかわってこられた西村幸夫氏に、まちづくり団体とのかかわりや新しいスタイルのまちづくりなど、これまでの、そしてこれからのまちづくりについてお話を伺いました。

（聞き手・編集部）

## ◆はじめの一步

——まちづくりとの最初の出会いとは？  
1970年代の後半ですが、大学院（東京大学都市工学科）に入ってますが、歴史的な町並みの調査に参加しました。フィールドは、中世戦国時代の町並み

が残る奈良の今井町です。この調査は文化庁が重伝建地区（重要伝統的建造物群保存地区）の制度創設にあたり、今井町をひとつのサンプルとして、ここでいろんな問題を洗い出して制度設計に役立てるのが目的でした。

当時は大学紛争が尾を引いていて、東大もまだ荒れていました。講義もあつたりなかつたりでしたから、なおさら「現場から学ぶんだ」という思いを強く持っていました。

とはいえ、最初から何か問題意識があつたわけではありません。ところが町に入ってみると、あたりまえのこと

ですが、生活があります。今井町には大きな地主さんがいて借家がある。借家に住んでいる人は大阪への通勤者が多いんですが、町並みをきれいにすれば家賃が上がって困る…。まちをきれいにすればみんなハッピーかという社会的なさまざまな問題があつて単純じゃない。地域から学ぶことを教わりました。

同時に、町家という日本固有の都市型住宅を再発見できたことは、その後の私の研究生活に大きな影響を与えました。

まちづくりにおいては、ルール・規制を地域の人が大事だと思つて納得して守ってもらわないといけない。地元としての合意形成が大事です。今井町にはその当時から「今井町を保存する会」などまちづくりを考える小さなグループがあり、熱心な人たちもいました。この人たちは規制に賛成する側ですが、地域で何かやろうとすると、た

くさん学んで、人格的にもしつかりしていなくてはいけません。その人たちにとつても活動自体が勉強なんです。じつに魅力的な人たちでした。

## ◆まちづくりネットワーク

——先生は以前から「まちづくりは人づくり」といわれていましたが、どうやってネットワークを広げられたのですか？

私にとって大きいのは全国町並みゼ

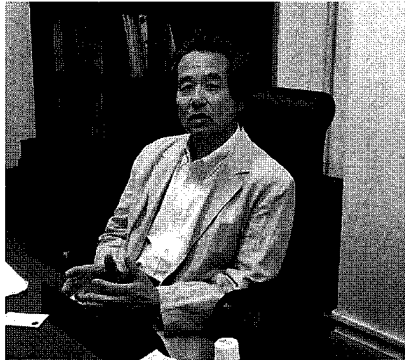
ミですね。これは1978年に始まったのですが、愛知県豊田市の足助で開かれた第1回大会に大学院の仲間と一緒に参加しました。この大会にはまちづくりについての情報を求めて、研究者や活動家、地元の人たちが集まっています。ここで出会った人たちとの交流はいいでも続いています。

\*全国町並みゼミ 全国町並み保存連盟が1978年から開催。各地の町並み保存・活用運動や歴史を生かしたまちづくりについての情報交換や事例の検証を行うとともに、会員の交流を図っている。ことし9月には倉敷で第38回大会を開催。同連盟は2003年にNPO法人の認証を受けた。

——これまで全国のまちづくり団体とかわつてこられた中で、特に印象に残っているのは？

なかなかつらい質問ですね。どれも印象に残っているというか…。ひとつは「小樽運河を守る会」。1

973年、小樽運河の埋立て再開発計画によって昔の町並みが失われることを危惧して市民が始めた保存活動に、私は大学院生の時からかわつています。いまは「小樽再生フォーラム」と名前を変えましたが、私と同年代の人たちががんばっています。地元の人と一緒に考え、外からの視点で地域資源を見つけてあげるのもわれわれの役割と考えています。「これはほかの町にないものですよ」と言つてあげると、それがまた新たなエネルギーを生む。長い付き合いという点では、飛騨古川（岐阜県飛騨市）もそうですね。こは町の観光協会自体がまちづくり団体みたいなものです。私が古川を好きなのは、町の人たちがとにかく熱心なこと。祭りがあるからボランティアの意識も高い。祭りのおかげで、パブリックのために自分が果たすべき役割を子ども頃から教えられているんですね。祭りが元氣なところはまちづくり



2013.6.5 東京大学先端科学技術研究センターにて

も元気です。

## ◆NPOのメリット

——まちづくりNPOもたくさん生まれていますか？

阪神淡路大震災（1995年）をきっかけにボランティア活動への関心が高まり、1998年に特定非営利活動促進法（NPO法）ができたのですが、その後で、まちづくりにかかわる人たちの意識は大きく変わりました。

特にお金について。それまでは「ボランティアなんだからお金のことには二の次」とされ、儲けることに抵抗があったのですが、NPO法人化することで、事務所を構えたり、永続させるための収入を得るのは当たり前になった感があります。志があり、組織になじまない人が起業してNPOを始めるケースも増えています。

もちろん、法人化しないで活動している団体もたくさんありますが、ある

程度大きい規模のことをやろうとする

と、法人化しているほうが何かと有利

です。たとえば最近の流れとして、官がすべての事業を自前で行うのではなく、民に助成して協働で事業を行う仕組みが増えています。そんな時、NPO法人であれば財務が公開されているなど透明性が高いことから、信頼して任せられると考えるようですね。

——〇〇まちづくりセンターもあちこちにありませんか？

こういった組織・団体は行政と民間をつなぐ役割を果たしています。公益財団法人やNPO、株式会社など運営の形態はさまざまですが、地域の活動への助成や交流支援などがメインですね。

市民参画型のまちづくりとして面白いのが、公益信託制度を活用したまちづくりファンドです。私はしばらくの間ですが、「公益信託世田谷まちづくりファンド」の運営に協力してきました。

会のホームページで読むことができません。なかなか面白いですよ。

## ◆生活のスタイルをアピール

——ほかにどのようなNPOに関心をお持ちですか？

いろいろありますが、まずは広島県福山市の瀬の浦の町並み保存運動ですね。運動の中心を担っている「NPO瀬まちづくり工房」の活動にはここ10年以上かかわっています。

もうひとつ、石川県加賀市の「NPO法人歴史センター大聖寺」とは、

かれこれ10年を超えるつきあいですが、瀬戸産さんというカリスマリーダーがいて、まちが随分元気になってきています。最近では「文化合宿」といつてまちを教材に合宿をする学生などを受け入れており、新しい形のまちづくりとして注目しています。

こういう活動をしている人たちは、生活のスタイルをちゃんとアピールし

た。公益信託制度とは、公益的な目的で一定の財産を銀行などに預け、銀行がこれを管理・運営しながら公益活動を行っていくという仕組みです。世田谷まちづくりファンドは「一般財団法人世田谷トラストまちづくり」が全国に先駆けて1992年に設立。さまざまにまちづくり活動への助成を行っています。ただ、最近は金利が下がったことで、公益信託方式はむずかしくなっているようです。

## ◆NPO神田学会

——先生がいまハマっているNPOは？

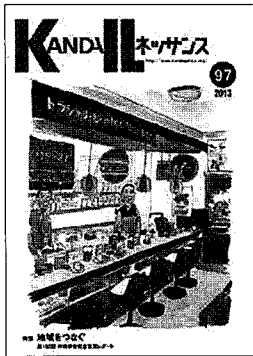
手前味噌になりますが、「NPO神田学会」。私が理事長をしています。

この団体は東京・神田の株式会社久保工の久保金司さんを中心に永年活動を続けている団体で、神田明神の権宮司さんや、先日出火騒ぎのあった藪蕎麦のご主人などが理事を務めています。

ている。この土地に暮らすというのはこういうことなんだ、お金をかけなくてもこれだけやれるんだ、という意気込みというか自信というか、応援したくなりますね。

振り返ってみると、私は最初の頃から、都市計画の名目で大きなものをつくり、道路をつくり、再開発をして大きな絵を描くことに違和感を感じていたようです。その町に住む人々の生活、土地の記憶を大事にしたまちづくりの可能性を追い求め、そこから学んできたといえるでしょう。

にしむらゆきお・東京大学先端科学技術研究センター所長・教授 1952年福岡市生まれ。東京大学都市工科大学院修了。1996年より東京大学教授。2013年より現職。専門は都市計画・都市保全計画・都市景観計画など。工学博士。主な著作に『西村幸夫風景論ノート』（鹿島出版会）、『都市保全計画』（東京大学出版会）、「歴史を生かしたまちづくり」、『町並みまちづくり物語』（以上、古今書院）ほか多数。



「KANDA ルネッサンス」最新号

1987年に始めたまちづくり勉強会「神田学会」は、いままでに140回を超えています。すごいでしょう。そのほか、神田川を船に乗って下ったり、花見のまちあるきなどいろいろなイベントを開催しています。

地理に近いことといえば、地元で100年以上続いている老舗を調べて、「神田老舗マップ」を作ろうとしています。全部で140社ほどあるらしいのですが、既に30社以上から聞き取りを終え、神田学会が発行している「KANDA ルネッサンス」というタウン誌に順次載せています。「百年企業のれん三代記」というこの連載は神田学